

「信心はまことのこころ」

林 信昭

おたがいに70歳を超えた友人が、「わしは毎朝1時間散歩して観音さんと天神さんを拝んでくる。そのお陰で元気や。信心は大事やな。」と自慢げに言う。自分の元気なことを願い、家族の健康やしあわせを頼み、事故や病気に会わないことを祈る。かみ・ほとけに自分の都合ばかりを要求しています。何を信じ、何を拝んでいるのか。この拝んでることが信心かと問うてみたくなりました。

皆さんはどうお考えでしょうか。かみ・ほとけを拝んでも、この世は、私たちの思うようにはなりません。思うようにならないのは、すべてが移り変わるからです。しかもその時その時のご縁によって予想もできない結果となってきます。想定外です。

仏教では、私たち人間を含めこの世のすべてが「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもって、そらごとたわごと、まことあることなき」…ところと大変否定的にとらえています。私たちの信心もそらごとたわごとの何か頼りないものではありませんか。

「信心といえる二字をばまことのこころとよめるなり」と蓮如上人はおっしゃっています。このまことのこころはどこからくるのでしょうか。信心とは帰依の心であるといわれます。帰依とは、信じ、たのみ、お任せすることでしょう。これって、こうしてくださいと願い、頼んでいた先ほどの自分の都合を要求することとは違いますね。

親鸞聖人は、「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべし」と教えられています。私の要求ではなく、阿弥陀仏の本願を信じ念仏申せば、すくいのはたらきが阿弥陀仏から念仏する者に届くところが信心です。これが、たまわりたる・他力の信心、まことのこころであるのです。

ご和讃に「まことの信心うるひとは このたびさとりをひらくべし」とありますが、思うようにならないこの世で、このままでいいのだと、前に向かってうなずいていけるのが、まことの信心です。